

# 浅鉢形土器出現の背景

—飯山満東遺跡を中心として—

古 内 茂

## 目 次

1. はじめに.....	23
2. 土壇の規模と出土状態.....	23
3. 浅鉢形土器の形態.....	25
4. 用 途.....	30
5. 出現の背景.....	31
6. おわりに.....	33

## 1. はじめに

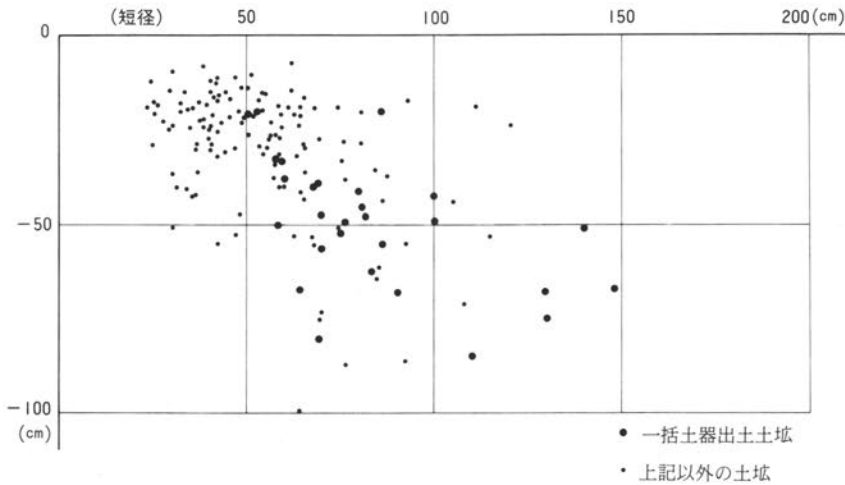
船橋市に所在する飯山満東遺跡が調査されてからすでに10年余が経過した。当時、関東地方の縄文前期の集落址として著名な遺跡は神奈川県南堀遺跡（和島 1958）が知られている程度であり、集落の問題はもっぱら中期に限られていた。飯山満東遺跡の調査では報文でも触れられているとおり、前期後半の文化内容を把握するうえでも重要な遺跡として位置づけられており、検出された遺構は住居址30軒、土坑200余基となり最大級の遺跡としての評価を得た。土器群も黒浜式から諸磯B式・浮島式へと継続するものであり、とりわけ200余基の土坑からは多数の一括土器が出土した。この点では前例を見ない様相を呈しており、一躍注目されることとなった。

その後、各地で相次ぎ縄文前期の調査例が報告される中で福井県鳥浜貝塚（森川他1979）、長野県阿久遺跡（樋口他1982）の正式報告が刊行されるに及び前期の文化内容に対する評価基準が根本的に覆されるかの如き資料が提示されるに至った。この二遺跡のまえには飯山満東遺跡の出土資料はいかにも影が薄れてしまうという感さえもたれた。今日に至って飯山満東遺跡を取り上げたところで、時既に遅しという感否めないが筆者自身もこの遺跡の調査に参加し、縄文前期という時代に少なからず興味を抱いてきた。また調査の二年後、飯山満東遺跡と同様な遺構の性格を有する印旛郡白井町復山谷遺跡（清藤他1978）の調査にも恵まれたことから、予々一片の文章を残したいと考えていた次第であった。この度、執筆の機を得たので筆者なりに両遺跡の資料を整理し、縄文前期でもとりわけ浅鉢形土器に焦点を絞り、その出現に関する背景についてここで考えてみたい。

## 2. 土坑の規模と出土状態

調査により検出された200余基の土坑は大小様々であり、何基もの重複が認められた。いまこれらを規模により図化してみると第1図のようになる。第1図は報告書のピット群一覧によりおよその形状を判断できるものを選択し、最小口径値（短径）、及びローム下の掘り込み（深さ）をもって作製してみた。また重複の著しいものや底径を計測できても側壁の失われているもの等について除外した。図示したように一括土器及び大形破片を出土した土坑については印の大小により区別してみた。

この結果、図示したように短径は50cmを境界として一括土器出土の有無が分離できた。つまり短径50cm以上の規模を有する土坑は計95基を数え、その内一括土器を出土したものは28基となり約30%の割合で土器が検出されたことになる。また、これらをさらに深さ50cmに限定した



第1図 土坑群の規模

場合には26基中、13基で一括土器が検出されることとなり、その割合は50%に及ぶ。深さが増すのに比例して一括土器出土の土坑が増加すると言えよう。加えて飾身具である玉類も6点検出され、内5点が土坑内より出土した。これらの土坑の短径はすべて50cm以上を計測するところから一括土器出土の土坑と規模の点からも一致する。一方あまり遺物を出土しない土坑は短径が50cm未満であるか、または深さが20cm以下の浅いものに限られる。この点、1例だけ明確な掘り込みをもたずに埋甕のような形で検出された例も存在するが概むね小規模な土坑からは確実な遺物の出土は認められなかった。つまり飯山満東遺跡の土坑群に関して言えば、その規模において短径50cm以上、かつ深さが20cm以上を示す場合には確実に縄文前期に伴う土坑と考えてよいと理解できよう。

一括土器の中でも特に浅鉢の出土状態について観察すると、土坑底面から出土する場合よりも覆土中から検出されることが多い。言わば浮いた状態にあるところから、後にも触れるが「土坑墓」として把える場合には埋葬時に遺体の脇に安置したか、頭上に置いたものと思われる。中でも少例ではあるが土器の口縁部を下に、底部を上にしたいわゆる倒立の形で検出されることもあり、あたかも死者に蓋を被せたような形となり埋葬を連想させる。このような例は中期の土坑群にもしばしば現われるのは周知のとおりである。

飯山満東遺跡において浅鉢形と考えられる土器は計44点出土しており、内2点が住居址及びグリッド出土で圧倒的に土坑出土が多い。しかも完形品かそれに近いものばかりであり、欠損品は小破片を除いて6点だけであった。6点の中でも $\frac{1}{2}$ 以上欠損しているものはP2出土の1例だけに限られ驚異的な遺存状態を保っていると言えよう。この点では住居址等からの出土品についても同様な傾向が認められる。しかも復山谷遺跡でも4点の浅鉢はすべて完形かそれに

近い状態であった。

一方、土坑内出土の深鉢を見ると、浅鉢とは正反対に大形破片の出土は多々認められるものの完形またはそれに近い土器は僅少となる。P18（黒浜期）とP169（諸磯期）で1点づつ検出されているが明確に深鉢と言えるものではなく、鉢形土器と呼称されるべき器形のものである。その他に注目できる事例として深鉢の上半部を意識的に破碎し、浅鉢の代用品として転化させる場合もある。その例としてP57、P172、P210での出土品をあげることができよう。この手法は復山谷遺跡でも認められる。

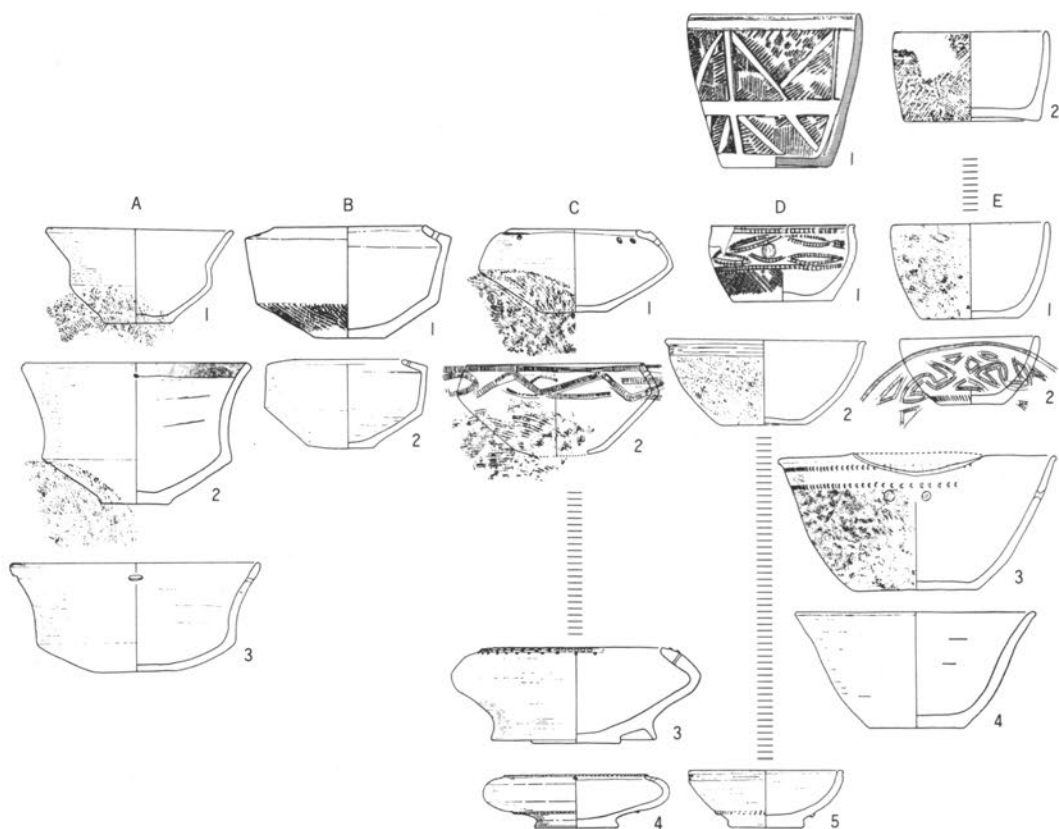
土器の破損状態について言うならば、小形土器は概して遺存が良く、大形品になればなるほど破損し易いことは一般的傾向として理解できようが、土坑群といういわゆる聖域化された中での検出状況では、住居址等の遺構から出土するものと異なって当然であろうし、浅鉢、深鉢を問わず完形品を埋設すれば攪乱を受けない限りそれに近い遺存状態で検出されてしかるべきと言えよう。とすれば当時の人々にとって深鉢と浅鉢の取扱いについてはすでに差異が生じていたとも考えられる。少なくとも飯山満東遺跡での深鉢は、埋設時にはすでに破損していたものであり、それを土坑内に副葬品として置いたものと考えてよいであろう。

以上、飯山満東遺跡検出の土坑群及び土器群の関係についての諸見を述べてみたが、土坑群では人骨あるいは骨片等の確認はできなかった。しかしながら今までみてきたように一括土器または玉類の出土から推察すれば、土坑群の大半は「墓址」と考えて間違いあるまい。そしてこれらの墓址は、ある特定集団の共同墓地としての性格を強く感じさせるものである。いわば集落の一角に造営された墓域であり、出土遺物は被葬者が生前使用していたか所有していた副葬品と考えるのが妥当となろう。そこでこれら土坑群の範囲を墓域として扱った場合、幼児用の施設も十分考えられるところから小規模土坑もあながち埋葬用以外の土坑として切り離すこともできないであろう。

### 3. 浅鉢形土器の形態

飯山満東遺跡出土浅鉢の内容の豊富さは今さら述べることもないが多種多様であり、同時期に属する遺跡では比較対象できるものはない。後述するように近隣での出土例はその大半が飯山満東遺跡出土例の中で扱えられるものであり、換言すれば図示した一連の土器群は前期後半の諸磯期を代表するものと言っても過言ではない。

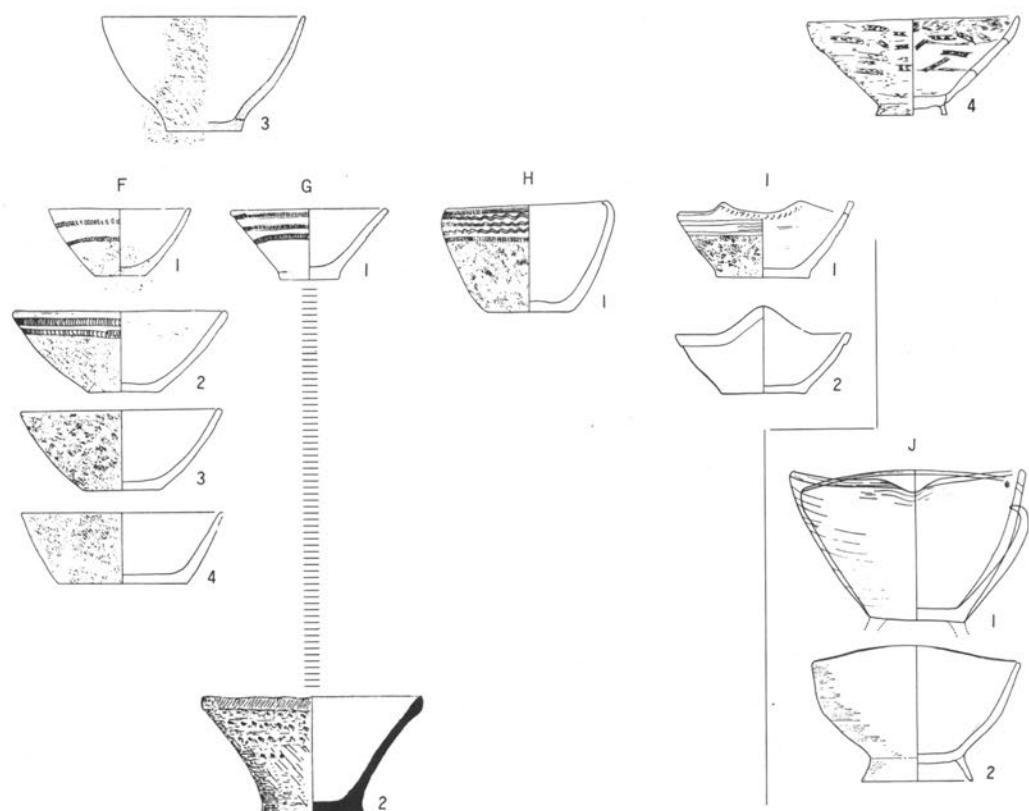
さて、浅鉢形土器の出現は、現状では縄文前期初頭の花積下層式（桑山 1980）に求められよう。これは平底土器の普及と無関係ではなからう。次の関山期でも幸田貝塚（八幡他1973）等で出土しており、次第に一般化していったものと思われる。器形に変化が現われるのは黒浜



第2図 浅鉢形土器の形態(1)

期であり、図示した上段4の台付土器はその端的な例と言えよう。花積下層式・関山式の浅鉢は「浅鉢で煮沸調理…食物などをもりつける容器ではないらしい」(江坂 1964)との見解もあるところから浅鉢として本来の機能を有した土器は黒浜期以降に求められるのではないだろうか。またこの時期は深鉢にもバラエティーが生じ様々な器形が認められるようになる。その好例が柏市鴻ノ巣遺跡(古内他1974)等になろう。さらに黒浜期後半では胎土中の繊維の減少という事実も見逃せない。このような一連の変化の中でも特筆すべき事項は台付土器の出現だけで、他に目新しいものはない。だが、図示したようにこれが諸磯期へ移ると大きな変化が生じてくる。器形だけをみれば系統的に連続するものも存在するが、明確に黒浜期と諸磯期の間で一線を画すると考えられる浅鉢が出現する。それは突如として出現したと言えなくもない。このように複雑化した浅鉢ではあるが、飯山満東遺跡例を中心にしてその器形を幾つかに便宜的に分類してみた。この分類に従って近隣遺跡出土例を参考にしつつ説明を加えたい。

**Aタイプ** 体部に段を形成する一群の土器で、出土量は比較的多い。有段という点では次のB



第3図 浅鉢形土器の形態(2)

タイプと共通するところもある。しかもA3のように穿孔も認められるため用途としてもBタイプとの関連は強いものとなる。ここではA2の口縁内側に施された丹塗にも注目したい。明らかに特別な配慮が考えられる。副葬品に相応しい浅鉢とすることができよう。このタイプの類似品を捜すと東京都本町田遺跡（久保他1969）、埼玉県大谷場貝塚（三友他1968）、復山谷遺跡等の複数遺跡でその存在が確認されている。中でも最も形状の近似するものは本町田遺跡例で、住居址出土ではあるがA2と瓜二つである。他は土坑出土で復山谷遺跡例では口辺が垂直に立ち上がり、大谷場貝塚例では大きく外反する。

**Bタイプ** B1例は復山谷遺跡出土品で、次のCタイプでも見られるように口縁部に孔を有す。基底部分は大きく外反しながら立ち上がり、途中で垂直に変化し、口縁部に至ると一転して「く」の字状に内彎してしまう極端な作りとなる。穿孔はB1例で2か所、B2例では対角線上に4孔を設けている。類似品は大谷場貝塚で飯山満東遺跡同様に土坑から1点出土している。この孔は2個と1個が対に穿たれているという。本町田遺跡でも口縁部欠損品ではあるが検出されている。このことからAタイプを含めかなり定型化していた可能性が強い。これを裏付けるか

のように、岐阜県村山遺跡（塩屋他1960）では底部の作りが若干異なるものの本タイプに近似した浅鉢が出土している。

**Cタイプ** 概してBタイプと似ており、口縁部は「く」の字状に内彎し屈折部に最大径が求められる。後続すると考えられるC3、4では屈折部は曲線へと変化し、底部も著しい変容を遂げる。穿孔もすべてに認められ、この点でも諸磯A式から同B式へと図示したように続くものと思われる。さらに詳細に器形を観察すると、内彎した口縁の端部が立ち上がるような形を呈しており、これを穿孔と関連づけて考えるならば孔は使用時に蓋を用いるために穿たれたのではないだろうか。むろん蓋は木製品となろうが、その存在は十分推測できよう。Cタイプ、とりわけ後出のものは長野県に類例が多く、有明山社（藤沢他1969）や大倉崎遺跡（高橋他1976）等で検出されており、次いで罫を有する諸磯C式へと変化する（金井 1979）とともに、中期の有孔罫付土器の始源をCタイプ後出例に求め（武藤 1970）ている。ただ本県周辺では諸磯C式以後の資料が少ないため円滑に有孔罫付土器へと変遷していったかどうかは即断できない。

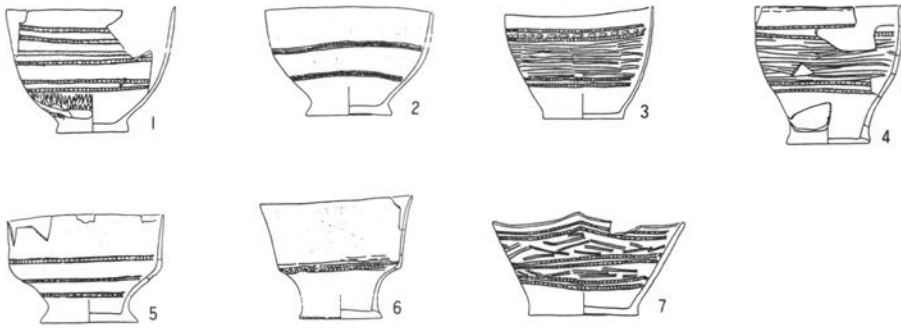
**Dタイプ** 器高の低い浅鉢で、口唇部に近い部分でやや外反する。口縁部だけをとればHタイプとしたものと逆の形となる。飯山満東遺跡でのこのタイプは出土例が多く、D3、4といったような比較的大形品も存在する。Fタイプ同様広範に使用されていたものと思われるが無文の場合は少なく復山谷遺跡で類似品が出土しているにすぎない。この無文例は、基底部から緩やかに立ち上がり口縁部が次第に外反するような器形となり奈良・平安期の坏形土器を想定させる。いずれにせよ後出する浅鉢D5も存在するところからかなり一般化された器形とも言えよう。

**Eタイプ** 基本的にはFタイプと同様で、異なる点と言えば口縁部の作りぐらいであろう。器高が低いわりに器厚のある頑強な作りとなる。上段の1・2は黒浜期の新しい時期と古い時期に属するものであるが近い形状を呈しているため図示した。このタイプに近い浅鉢を出土した遺跡として長野県阿久遺跡、福井県鳥浜貝塚などがあげられようが、京都府北白川小倉町遺跡（梅原 1983）出土例も共通性を見い出せる。言ってみれば浅鉢らしい浅鉢であるがゆえ広範な分布を示すものと考えられる。

**Fタイプ** 底部の作りはEタイプと同様で、口縁だけが大きく開く。F1・3例ではやや緩やかなカーブを描く。上段3の流れを汲んだものと考えられ、飯山満東遺跡では量的に最も多い。他の遺跡でも類似品の出土が認められる。復山谷遺跡例では無文で形状としては上段の3に近く、本町田遺跡では平行沈線により器面が飾られる。いずれにしろこのタイプも飯山満東遺跡だけではない。

**Gタイプ** この種の浅鉢は典型的な浅鉢と言えようが、出土量は少なかった。作りは、基底部からの立ち上がりとそのまま大きく外反し口縁に至るところに特徴がある。むろん上段3の系





第4図 成田市加定地遺跡出土の浅鉢（約1/8）

統を引くものであり、後続する例もあるので図示してみた。G 2は銚子市粟島台遺跡（大場他1952）から出土した浅鉢である。実見したわけではないが図及び報文から浮島Ⅲ式と考えられる。口縁部は浮島式の特徴をよく表わしているが、器形はG 1とよく似ている。

**Hタイプ** 出土例は図示した1点で、他からの出土も知見にない。その特徴は口縁部が極端に内彎するところにある。内彎という点ではB・Cタイプと共通するものの、底部の作りはむしろD・Eタイプと類似する。唯一の例であるため多くは語れない。

**Iタイプ** このタイプも特徴のある口縁を形成する。いわゆる波状口縁で、2～4組の波状を作り、他は典型的な浅鉢としたF・Gタイプに近似する。出土例は少ないが波状口縁という点では各地の遺跡からその出土が報じられており、一つの形態として存在することに異議はなからう。深鉢の波状口縁は一般化しているところからもそれは言えよう。ただ形状が異なるため本例と同様なものはない。波状という点だけを見れば、阿久遺跡や神奈川県平台貝塚（岡野 1973）でも出土し、宮城県三神峯遺跡（岩渕他1980）では前期初頭の土器にも認められるという注目すべき事実が提示されている。

**Jタイプ** 形状は一定しないが、いわゆる台付の浅鉢である。台そのものは黒浜期にも認められ、小さいながらも歴然とした台付土器が我孫子柴崎遺跡（古宮他1976）で出土している。上段4に図示したが、ここでは深鉢の台部だけの出土例もある。阿久遺跡でも1点出土しているところから台付土器の存在は明白であり、浅鉢形土器群の一角を占めていたものと思われる。台付でも、浅鉢とは言いがたく高杯を思わせるようなものが東京都居木橋C貝塚（坂詰 1956）から出土しているのも興味深い。

以上、飯山満東遺跡出土の浅鉢<sup>\*</sup>をA～Jタイプに分類してみた。それぞれに特徴のある形状

\* 分類したものをすべてを浅鉢と呼称することは無理かと思われるが、この時期は鉢形を基本とし、深鉢、浅鉢という分類が定着しているためここでは浅鉢として取扱った。

を呈し、浅鉢のパラエティーを再認識させ得るに十分な資料と言えよう。他の遺跡での出土例を加えればもう2～3の分類も可能となろう。最近報告された成田市加定地遺跡(寺内他1984)でもA・Iタイプと分類できるものの他にも図示したような浅鉢が出土している。ここでの特色は器形よりもむしろ丹塗りされていることであろう。図示した7点のうち4点(1、2、5、6)に認められるという。時期的には浮島期の特徴が(1)に認められ、飯山満東遺跡に後続するという点でも興味ある事実を提供した遺跡となろう。また、同じ浮島系でも流山市中野久木遺跡(中山他1974)では住居址内から第4図-3・4と類似した興津式土器が1点出土していることも付記しておく。

#### 4. 用 途

前項では浅鉢の形態を中心に10種に分類すると同時に近隣遺跡での出土品との関連について触れてきた。次にこれらの形態をもとに副葬される以前の用途についても考えてみたい。まず用途に関して最も問題となるのはいかなる性格の遺構から出土したかという点に集約されよう。幸いにして飯山満東遺跡は住居址及び土塚(墓址)という二つの異なる遺構から構成されていた。結果的には土塚での使用が最終用途となろうが、種々の形態を有する土器群であり、全器種が同一の目的のために製作、使用されていたとも考えられない。この点に留意して他地域<sup>\*</sup>での出土例を参考にしながら論を進めてみたい。

まず、土塚出土の土器についてみると、前述したとおり県内で復山谷遺跡、加定地遺跡があり、埼玉県でも大谷場貝塚、金堀沢遺跡(中島 1977)などが知られており、長野県では上原遺跡(大場他1976)、丸山遺跡(高橋他1979)、有明山社等がある。これらの遺跡ではすべて浅鉢を出土し、形態分類したうちでもA・B・Cの各タイプの浅鉢が目立つ。

一方、住居址あるいは包含層、貝層等からも多く出土し、古くは神奈川県矢上谷戸貝塚(江坂 1951)、東京都四枚畑貝塚(江坂 1951)、同本村町貝塚(山内 1967)、山梨県花鳥山遺跡(磯崎 1964)(山本 1955)等が知られており、矢上谷戸貝塚例はE・Fタイプの典型的な浅鉢である。また前項でも触れたが、諸磯期以前の浅鉢は県外でも多く知られているとともに県内でも図示した鴻ノ巣遺跡、柴崎遺跡、布施山ノ田台遺跡、柏市花前I遺跡(清藤他1984)からも出土しているがすべて住居址内出土品であり、形態的にはD・E・F・I・Jの各タイプ

\* この種の浅鉢は本県の他に長野県下でも多数知られている。これら一連の浅鉢を「特殊浅鉢形土器」として、分布・編年・性格等を論じ(金井 1979)、長野県19遺跡、その他周辺遺跡14か所を紹介している。いわゆる諸磯文化圏の大半を網羅しているため、分布状況については金井論文を参照されたい。

となる。これら前段階の土器群は遺構の性格から、より日常用品的（什器）な要素を有するものと理解したい。

諸磯期の例で興味ある事実を提供した遺跡では長野県大倉崎遺跡と東京都本町田遺跡をあげることができる。前者は、諸磯B式期の住居址であり時期こそ若干異なるが一軒の住居址から多数の浅鉢を出土した。強いて言えばCタイプとなろうが通常の住居址としては他に類例がない。ただ惜しむらくはこの遺跡での完形品は住居址ではなく包含層の出土であった。後者の本町田遺跡でも住居址内出土土器もさることながら投棄されたような状態で検出されていることに注目したい。そこには少なくとも浅鉢が3点以上含まれており、何らの遺構も存在しないという。また住居址出土という点では埼玉県金堀沢遺跡では口径42.2cm、器高23.3cmの超大形浅鉢が出土している。いずれにしてもこのような類例は少なく一般的には一遺跡で2～3点の出土となり、小破片での出土となれば一括して取り上げられる程度である。これに対し、浮島式とは言えば栗島台遺跡、茨城県所作貝塚（寺門 1975）、浮島貝ヶ窪貝塚（西村 1966）等で少量の出土が知られる程度である。

以上、これらの事例はすべて生活の中での使用の一端を窺せるものであり、生活と密着した土器群と言えよう。つまり換言すれば日常生活の中ではD～Jタイプの土器群が使用され、墓址での副葬品としてはA～Cタイプの土器群が主に使用され、D～Jタイプはそこでは従的な役割を果たしていたとも考えられる。そして浅鉢総体としてみれば、概して完形あるいはそれに近い遺存状態で出土するところから深鉢のような消耗品の性格のものではなく、財産的な要素を含んでいたように思われてならない。

## 5. 出現の背景

これまで述べてきたとおり浅鉢でもD～Gタイプは諸磯A式期以前から存在していた。これに対しA～Cタイプは明らかに諸磯A式以降の所産となる。ここではA～Cタイプの浅鉢を中心にその出現の背景について考えてみたい。

まず集中的に検出される土坑は、これまで述べたとおり一括土器及び玉類の出土からもはや墓址と考えて異論のないところであろう。とすれば土坑から出土する遺物類の大半は副葬品となる。このことは出土遺物の遺存状態からも窺うことができよう。とりわけ浅鉢は土坑、住居址等の遺構の性格を問わず遺存状態は良好で大半が原形を把握することが可能となる。浅鉢は本来小形品がほとんどであるため壊れにくいという長所はあるにせよ他の深鉢とはその扱いにおいても根本的に異っていたようにも思われる。また文様の簡素化、丹塗手法の発達という事実も見逃すことはできない。土器に限らず表面に丹塗りを施すという行為は既に行われていた

と考えられるが、それを土器に用いたという点では明確にいわゆる什器として性格を逸脱し、それ以外の用途・目的を保持していたものと考えられる。いずれにしても浅鉢は家族間での共有物という意識から脱却し、個人的な所有の域に達していたのではないだろうか。このことは土器の一生が、製作—使用—破損—廃棄という一定の過程を経てその目的を果たすわけであるが、こと浅鉢に関しては最終的使用が副葬にある点深鉢とは大きく異なることとなる。とりわけA～Cタイプにその傾向が強いと言えよう。

一方、土坑を墓址とする最大の根拠は埋葬人骨の検出となることは言うまでもない。しかし未だ人骨検出という報文には接していない。おそらくローム層中に消滅したものと思われる。それ故、土坑に埋葬された男女の区別はもちろんつかない。一般的に土器製作は婦女子の労働分担の中に取り込まれていると考えられている。しかも製作の主体は消耗品的要素の強い深鉢の類であったことも事実であろう。このことから別格の扱いを受けていた浅鉢とそれ以外の一連の土器群とを区別して考えれば埋葬時に使用する浅鉢—成人男子、深鉢—子・婦女子との推定も成立するかもしれない。これには遺存のよい資料の検出をまつほかはない。

さて、取り止めのないことを述べてきたが縄文時代前期では確実に集落規模が拡大されていた<sup>\*</sup>。調査により多数の住居址が検出されることから容易に認識できよう。これはとりもなおさず一定期間の定住を裏付けるところとなり、集落の安定（清藤 1978）として把握されることにもなる。前述した柴崎遺跡<sup>\*\*</sup>はその典型とも言えよう。言わば中期の環状集落形成の始源をこの期に求めることができるのではないだろうか。また墓址の発達も集落構成とは無関係であるまい。集落維持を目的とした集団での規制は、墓域という死後の世界にまで及んだとみてもあながち間違いではあるまい。それには背後に集落が存在し、当時の人々の活動領域の中心ともなれば必然的に人々は活動し目的達成後は集落に帰還することとなり、最終的にはその地で生涯を閉じることとなろう。その結果、大集落ではその付近に墓域が営まれたとしても不思議ではない。つまり、墓址・墓域といった埋葬施設は一定以上の集落が成立してこそ存在し得たとも言えよう。

また墓址の設営とともに必要となるのは副葬品である。玉類等の装飾品は、貴金属を知らない当時の人々にとっては最も貴重なものであったろうし、誰でも所有できたとは思えない。このような状況の中で、生前愛用してきた浅鉢類が埋葬されるようになったのではないだろうか。

---

\* この傾向は諸磯期以前の花積下層期に溯って認められる。松戸市幸田貝塚（八幡他1971）では花積下層式・関山式土器を出土する大集落が検出されているところから縄文前期の集落構成を理解するうえでも重要な遺跡となろう。

\*\* 本遺跡の場合、規模は小さいながらも黒浜期の環状集落を構成していた。

それもA～Cタイプの浅鉢には穿孔があるところから、その中に供物等を納め蓋をして埋葬したとするのは考えすぎであろうか。これらはあくまでも推定の域をでるものではないが十分考えられることである。さらにA～Cタイプの浅鉢は、前期末の資料の中には見出すことはできないが、形態的にみれば有孔罫付土器への変化はともかく中期の典型的浅鉢へと変遷する過程においても多分に影響を与えていったものと考えられる。

## 6. おわりに

本論は時間的制約もあり、飯山満東遺跡出土の資料を中心とした構成に終始してしまった。縄文前期は環境の変化、貝塚の発達、集落規模の拡大等興味の尽きない問題がある。これらを考慮した中での検討であればより具体的な指針が示せたと思うが一遺跡での発掘調査結果ではおのずと限界があり、墓址と土器にとどまり、さらには收拾のつかないようなものとなってしまった。いずれにしても集落構成は大きな問題であり、近年次第に資料の充実をみている。このことについては、あまり触れ得なかったが機会をみて再考してみたい。

### 参考文献

- 磯崎正彦 1964 「縄文式土器」『日本原始美術』1 講談社  
 岩淵康治他 1980 『三神峯遺跡発掘調査報告書』 仙台市教育委員会  
 梅原末治 1983 『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊 臨川書店(復刻)  
 江坂輝弥 1951 「縄文式文化について」歴史評論32 河出書房  
 江坂輝弥 1964 「縄文式土器各論II—前期の土器—」『日本原始美術』1 講談社  
 大場磐雄他 1952 『粟島臺石器時代遺跡調査報告』 千葉県銚子市公正市民館  
 大場磐雄他 1976 『上原』 長野県文化財保護協会(復刻)  
 岡野隆男 1973 『平台貝塚』  
 金井正三 1979 「縄文前期の特殊浅鉢形土器について」信濃31—4 信濃史学会  
 久保常晴他 1969 『本町田』 ニューサイエンス社  
 桑山龍進 1980 『菊名貝塚の研究』 菊名貝塚研究会  
 古宮隆信他 1976 『我孫子市柴崎遺跡調査報告書』〈第三次・第四次〉 我孫子市教育委員会  
 坂詰秀一 1956 「諸磯式異形土器」銅鐸12号 立正大学考古学会  
 塩屋雅夫他 1960 『村山遺跡』  
 清藤一順他 1978 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』VI (財)千葉県文化財センター  
 清藤一順 1978 「集落の居住領域と土壌」どるめんNo16 JICC出版局  
 清藤一順他 1984 「花前I遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II (財)千葉県文化財センター  
 高橋 桂他 1976 「北信濃大倉崎遺跡調査報告」信濃28—4 信濃史学会

浅鉢形土器出現の背景

- 高橋 桂他 1979 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』 上水内郡牟礼村教育委員会  
寺内博之他 1984 「加定地遺跡」『成田市郷部北遺跡群調査概要』同遺跡調査会  
寺門義範 1975 『茨城県所作貝塚発掘調査報告』 霞ヶ浦文化研究会  
寺島和秀 1981 『山ノ田台遺跡発掘調査報告書』 千葉県柏市教育委員会  
中島 宏 1977 『金堀沢遺跡』 入間市教育委員会  
中山吉秀他 1974 『中野久木遺跡調査報告書』中野久木遺跡調査団  
西村正衛 1966 「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」学術研究15 早稲田大学教育学部  
野村幸希他 1975 『飯山満東遺跡』 (助千葉県都市公社  
樋口昇一他 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』一原村その5— 長野県教育委員会  
藤沢宗平他 1969 『有明山社』 長野県考古学会  
古内 茂他 1974 『柏市鴻ノ巣遺跡』 (助千葉県都市公社  
古内 茂他 1982 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』VII (助千葉県文化財センター  
三友国友郎 1986 『大谷場貝塚一ツ木遺跡』 浦和市文化財調査委員会  
武藤雄六 1970 「有孔鐔付土器の再検討」信濃22—7 信濃史学会  
森川昌和他 1979 『鳥浜貝塚』 福井県教育委員会  
山内清男 1967 『日本先史土器図譜』 先史考古学会  
山本寿々雄 1955 「甲斐花鳥山土器の分類について」銅鐸11号 立正大学考古学会  
八幡一郎他 1971 『幸田貝塚』 第1次調査概報 松戸市教育委員会  
八幡一郎他 1973 『幸田貝塚』 第3次調査概報 松戸市教育委員会  
和島誠一 1958 「縄文時代」『横浜市史』第1巻 横浜市

(千葉県文化財センター調査部)